1．発足の経過

・2017年3月2日京都新聞記事（投稿「妻失った男性　どう生きる」）

京都新聞

2017年(平成29年)3月2日 木曜日

妻失った男性 どう生きる

南区・富田 秀信(協同組合役員・66)

妻が昨年12月に亡くなりました。1996年に妻は若年性認知症を患い、私は妻の介護と仕事を両立し続けてきましたが、今では自分の洗濯物だけを干しながら、「独りぼっちになったんだな」と痛感しています。

通夜と葬儀では、妻を担当していたデイサービスセンターやケアマネジャー、ヘルパーの女性たちが号泣していました。私はお礼を述べ、「もうそちらへ行くことはないですね」と話しました。妻がいなくなり、今までの普通の暮らしが消えてしまったことがこんなにも悲しいものなのかと実感させられました。

その時、女性たちの視線は私に注がれましたが、「奥さんの変化が日々の元気のもとだと言っていたけれど、これから一人でやっていけるのかな」との思いがこもっているように感じました。確かに、夫に先立たれた妻はしなやかに生き続けていきますが、妻に先立たれた夫は生活力が弱く、情けなく人生を終えることもあるようです。私はどうなるのでしょうか。

私は一人で晩酌をしながら、「腑抜けの会」でもつくろうかと考えています。妻に先立たれた男性たちが悩みを打ち明け合い、残りの人生をどう充実して生きていくのかを考える場にできればと考えながら、賛同者を募っているところです。

二〇一六年一二月十九日、二十年間介護してきた妻急逝
そして、翌年（二〇一七年）三月二日の地元紙への投稿で、
全てが始まった。反響が大きかった。